THE NEWSLETTER OF NISHINOMIYA CITY MUSEUM

西宮市立郷土資料館ニュース　第39号

西宮市立郷土資料館　兵庫県西宮市川添町15番26号　〒662-0944
電話　0798-33-1298　web www.nishi.or.jp/homepage/kyodo/

第29回特別展示「西宮の前方後円墳—津門稲荷山古墳をさぐる—」

森下真企（当館学芸員）

はじめに

西宮市立郷土資料館では、平成25年（2013）7月30日（火）から9月1日（日）まで、第29回特別展示「西宮の前方後円墳–津門稲荷山古墳をさぐる–」を開催する。展示では、西宮市域に所在したとされる津門稲荷山古墳・津門大塚山古墳・上ヶ原車塚古墳の3基の前方後円墳について紹介し、阪神地域の古墳に関する考古資料も展示する。

1．西宮の古墳

3世紀後半頃から7世紀頃初めまでを古墳時代とよんでいる。古墳時代は大きく前期・中期・後期に区分することができ、古墳が造られる場所や規模、埋葬施設の形態、副葬品の種類や形の特徴などから、古墳が築造された時期を推定することができる。

西宮の古墳は前方後円墳と円墳が現在確認されている。前方後円墳は津門稲荷山古墳・津門大塚山古墳・上ヶ原車塚古墳の3基で、残念ながら3基とも昭和初期の頃には既に墳丘が失われているため、古墳の所在・規模・墳形など正確にはわからない。これらの3基以外は全て円墳で、具足塚古墳や関西学院校内古墳、仁川五ヶ山古墳群や八十塚古墳群などの群集墳も存在している。これら古墳は津門稲荷山古墳を除けば、いずれも古墳時代後期に築造された古墳である。津門稲荷山古墳は推定地での発掘調査がおこなわれ、調査では古墳に関連する遺構は検出されなかったが、5世紀後半頃の円筒埴輪が出土している。このことから、津門稲荷山古墳は古墳時代中期に築造された古墳であると考えることができる。その他の古墳は埋葬施設に横穴式石室を採用していることから、古墳時代後期に築造されている。

2．絵図や記録にからみた西宮の前方後円墳

西宮市の前方後円墳は今日では墳丘は残っていないため、目視で確認することはできない。しかし、西宮の周辺の遺跡の踏査をおこなった紅野芳雄氏の「考古小録」や、吉井良秀氏の『武庫の川千鳥』に古墳の様子について記されている。

「考古小録」（西宮市指定文化財）は西宮町長となる紅野太郎氏の長男の紅野芳雄氏が大正6年から昭和13年までの間に西摂津地域の遺跡の踏査をおこなった記録で、3冊のノートにまとめられているものである。また、「考古雑録」、「考古図譜」にも多くのスケッチが描かれており、西宮の遺跡を知る上で最も重要な資料の一つである。また、明治の頃に西宮神社の宮司を務めていた吉井良秀氏は、西宮の郷土史の研究者としても著名で、多くの著作を残している。その中には、西宮と芦屋の遺跡の様子を記録した『武庫の川千鳥』（大正10年刊）などがあり、西宮の古墳についても記されている。

写真1　「考古小録」「考古雑録」「考古図譜」

(1) 津門稲荷山古墳

津門稲荷山古墳については、大正12年国道2号の敷設工事の時に古墳の後円部の一部から土砂採取がなされたこと、土砂採取の残土から円筒埴輪と器種は不明であるが須恵器が出土したことが「考古小録」に記されている。また、大正2年に吉井良秀氏が調査した時に津門稲荷山古墳の形について『考古学雑誌』第3巻第1号に「摂津国武庫郡津門村の古墳と銅鐸」で「杓子形」と表現しており、紅野芳雄氏の描いた津門稲荷山古墳のスケッチをみると前方部のほとんどが失われており、まさに墳丘が杓子状になっていたことがわかる。

(2) 津門大塚山古墳

津門大塚山古墳についても紅野芳雄氏の「考古小録」「考古雑録」で知ることができる。「考古小録」には明治五年の国鉄線（現JR）の敷設替え工事の時に、土取りがされた「鬼塚」について記されている。鬼塚は津門大塚山古墳のことで、土砂採取により墳丘が失われてしまったことがわかる。また、吉井良秀氏の前掲の報告には「完全に存在した石槨も破壊され…」とある。これらの記述からは、津門大塚山古墳の埋葬施設について、竪穴式石槨か横穴式石室かは正確にはわからない。しかし、古墳の跡地にできた大塚池の実測を紅野芳雄氏がおこなってお

り、大塚池の形、実測図に記された8個の大きな石材、そして、古墳の石室石材が大塚池に沈んでおり、その石室石材について「大きなものは約2m」という吉井良秀氏の記録などから、津門大塚山古墳は横穴式石室を埋葬施設にもつ、古墳時代後期の前方後円墳と推定されている。

(3) 上ヶ原車塚古墳

安政4年の「大井滝用水論所絵図」には「高塚」と描かれた古墳がある。この「高塚」が上ヶ原車塚古墳のことで、吉井良秀氏の『武庫の川千鳥』の記述からは、上ヶ原車塚古墳が大正頃にはすでに墳丘が失われており、石室の一部が残っている状況であったこと、大正5年にはその石室の一部も撤去されたことがわかる。上ヶ原車塚古墳については、特に情報が限られており、この吉井氏の記述により、消滅直前の様子をわずかに知ることができるだけである。しかし、上ヶ原車塚古墳が「車塚」とよばれていたこと、石室に関する吉井氏の記述から、上ヶ原車塚古墳は横穴式石室を埋葬施設にもつ前方後円墳であると考えられている。

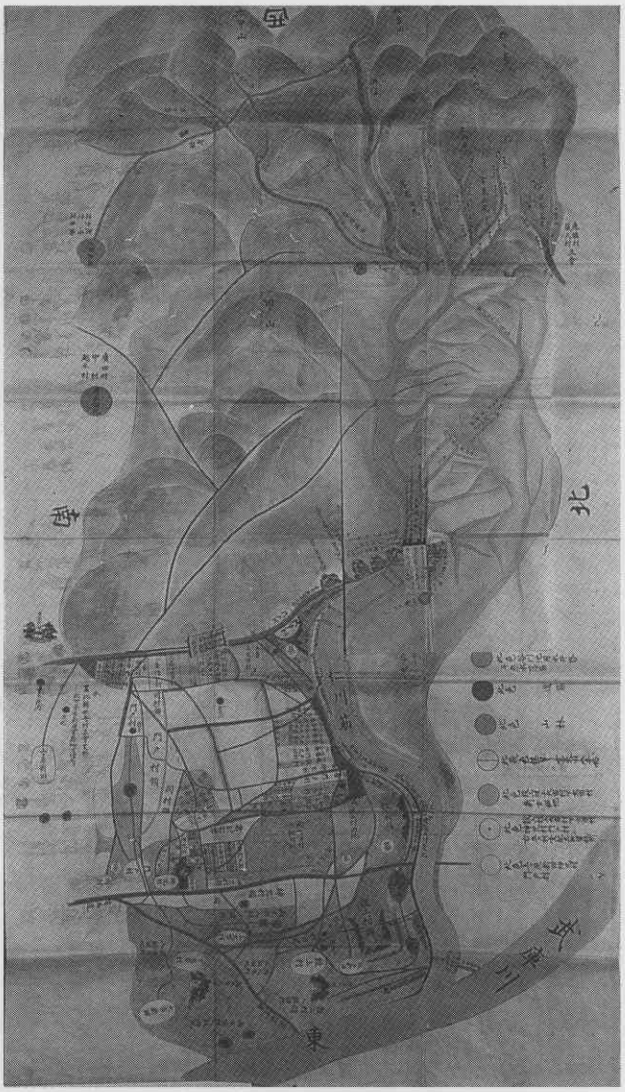


写真2　安政4年　大井滝用水論所絵図

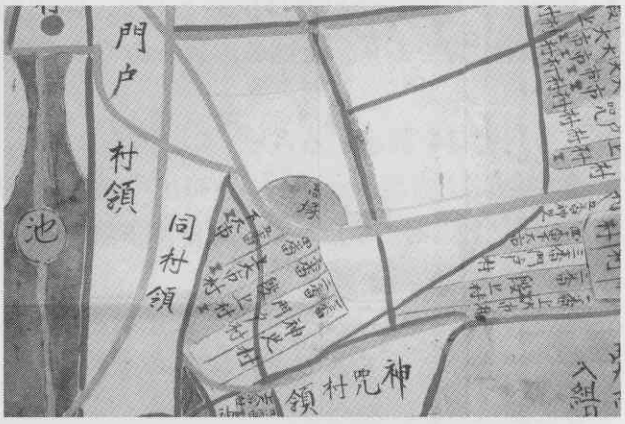


写真3　安政4年　大井滝用水論所絵図（一部拡大）

2．発掘された津門稲荷山古墳

平成6年に津門稲荷山古墳推定地における共同住宅の建設が計画されたため、発掘調査がおこなわれた。発掘調

査では古墳の所在を示す円筒埴輪と須恵器が出土し、津門稲荷山古墳推定地周辺に古墳があったことが明らかとなった。円筒埴輪はその特徴から5世紀中頃に製作されたのもので、出土した須恵器は6世紀頃のものが大半である。しかし、古墳に付随する遺構は検出されず、津門稲荷山古墳の所在を断定できるには至っていない。その一方で、発掘調査で古墳時代中期後半頃の円筒埴輪が出土したことは、周辺に古墳が所在していたことを示す有力な情報である。また、昭和52年頃に津門稲荷山古墳の推定地の南側の近接地で、須恵器や土師器とともに円筒埴輪が多量に採集されており、この時の採集資料が西宮市立郷土資料館と公益財団法人辰馬考古資料館に寄贈されている。この採集資料には、発掘調査で出土した円筒埴輪とは明らかに時期の異なる埴輪が含まれていることも注目に値する。このことは、西宮市教育委員会文化財資料第46号『津門稲荷町遺跡発掘調査報告書』でもすでに指摘されていることであるが、津門稲荷山古墳の周辺に別の古墳が存在していたという可能性もある。

古墳の墳形が階層性を示すという立場に立てば、前方後円墳は地域の有力者が築造したものということになるが、その周辺に別の古墳がたくさん造られるという事例は比較的多い。西宮の周辺でも神戸市の住吉宮町遺跡や芦屋市の打出小槌古墳周辺では、前方後円墳あるいは帆立貝形古墳が築造され、その周辺に一辺10m程度の方墳が多数造られるという状況がある。神戸市の住吉宮町遺跡には坊ヶ塚古墳、住吉東古墳という古墳があり、その周囲に多数の方墳が確認されている。芦屋市の打出小槌古墳も同様で、住吉宮町遺跡ほど明確ではないにしろ、打出小槌遺跡に隣接する若宮遺跡や月若遺跡で近年埴輪が出土しており、「若宮古墳群」の可能性が芦屋市教育委員会などによって指摘されている。しかし、武庫川東岸や猪名川流域での中期から後期の古墳の動態の様子は異なっている。これらの間に位置する西宮の津門稲荷山古墳周辺の様相が、将来的に調査が進展すれば、古墳時代中期後半から後期の西宮の古墳の動態についても、少し理解が進む可能性がある。今日では依然として、津門稲荷山古墳とその周辺地域に関する資料は断片的であり、上述の内容もあくまで推定を重ねたものである。

3．今回資料を展示する古墳

津門稲荷山古墳/金津山古墳/打出小槌古墳/万籟山古墳/勝福寺古墳/水堂古墳/御願塚古墳/上臈塚古墳/鵤塚古墳/柏木古墳/園田大塚山古墳/住吉東古墳

今回の展示を通して、古墳時代には西宮にも前方後円墳を築造できる者がいたことを紹介することができればと考えている。阪神間にある主要な古墳の埴輪を中心に展示している。

是非ご来館いただき、ご観覧くださいますように、お願いいたします。

岡本宇兵衛の日記を読む

衛藤彩子（当館嘱託）

はじめに

岡本宇兵衛（1702～1779）は、旧上瓦林村に居住し、代々尼崎藩の大庄屋を勤めた岡本家の当主である。当館では平成20年より「岡本家文書」（市指定文化財）の複製冊子（影印本）を製作している。そのうち第1巻について翻刻をおこない、平成23年に『研究報告』第9集として刊行した。その成果の一部は、第39回特集展示「瓦林の大庄屋　岡本宇兵衛」（平成25年4月2日～5月12日開催）、歴史講座「大庄屋の生活―岡本宇兵衛の日記を読む―」（平成25年5月8日開催）で紹介した。

「岡本家文書」の中で日記といえば、大庄屋日記と通称される文化5年（1808）から明治まで書き続けられた50冊が有名である。しかし、それよりも以前に書かれた日記も現存していることは、あまり知られていない。宇兵衛の日記の翻刻作業により、18世紀中頃の岡本家と西宮周辺地域の様子が明らかになってきた。その一端をまとめる。

1．岡本宇兵衛の日記

宇兵衛は元禄15年（1702）に生まれ、上瓦林村庄屋、尼崎藩大庄屋を勤めた。日記や宗門帳から知ることができる略歴を【表】に、宇兵衛時代の岡本家を【図】にまとめた。

宇兵衛の日記は3点ある（複製冊子第1巻・第2巻所収）。うち2点は上記『研究報告』第9集に翻刻した。「覚日記」は大庄屋となった寛保3年（1743）から寛延2年（1749）までつけられている。内容は公務の備忘録が中心で、藩役人への中元、歳暮の記録が目立つ。一方、「覚日記」と時期が重なる延享3年（1746）から書き始められた「数歳万覚日記帳」は、日常生活に関する記事が中心である。同じ題名で2冊に渡って天明3年（1783）まで続いている。安永8年（1779）の宇兵衛死去後は養子市兵衛が書き継いでいる。

2．日記にみる上瓦林村

日記が書かれていたのは上瓦林村が江戸時代で最も人口が増えた時期で、約400人が居住していた。宇兵衛は頻繁に村人の冠婚葬祭に呼ばれている。また、立

【表】　岡本宇兵衛年表

年号（西暦）	年齢	できごと
元禄15（1702）	1才	岡本清五郎（31）、女房（18）の長男市之介として誕生。当時の岡本家当主祖父市兵衛（57）は尼崎藩郡右衛門（=大庄屋）
正徳2（1712）	11才	9月4日、実母（28）死去。
正徳5（1715）	14才	勘四郎と改名。
享保3（1718）	17才	祖父宗林（73）死去。
享保8（1723）	22才	父宇兵衛（52）が大庄屋に就任。
享保12（1727）	26才	庄屋に就任。
寛保3（1743）	42才	7月18日、父宇兵衛（72）の大庄屋退役にともない大庄屋に就任。
寛延3（1750）	49才	岡本家の家族構成は、大庄屋宇兵衛、女房（29）、長女とみ（6）、次女さち（4）、父宗貞（74）、弟治八（35）
宝暦2（1752）	51才	大庄屋を退役。
宝暦4（1754）	53才	山田村清右衛門息子又五郎（23）が養子に入り、勘四郎と改名。
宝暦6（1756）	55才	養子勘四郎（24）に岡本家を譲る。勘四郎は庄屋に就任。12月22日、女房さよ（35）死去。
宝暦8（1758）	57才	2月2日、父宗貞（87）死去。
宝暦10（1760）	59才	1月26日、養子勘四郎（28）と長女とみ（16）が内婚礼。
宝暦11（1761）	60才	2月20日、養子市兵衛（28）・女房とみ（17）の婚礼祝儀を村中へ披露。3月1日、孫市之進（1）誕生。
明和2（1765）	64才	11月1日、養子市兵衛（33）が大庄屋に就任。
明和9（1772）	71才	宗順と改名。
安永3（1774）	73才	1月26日、剃髪。
安永6（1777）	76才	孫市之進（17）が元服し、勘四郎と改名。
安永8（1779）	78才	4月25日、病死。同月28日、葬送。

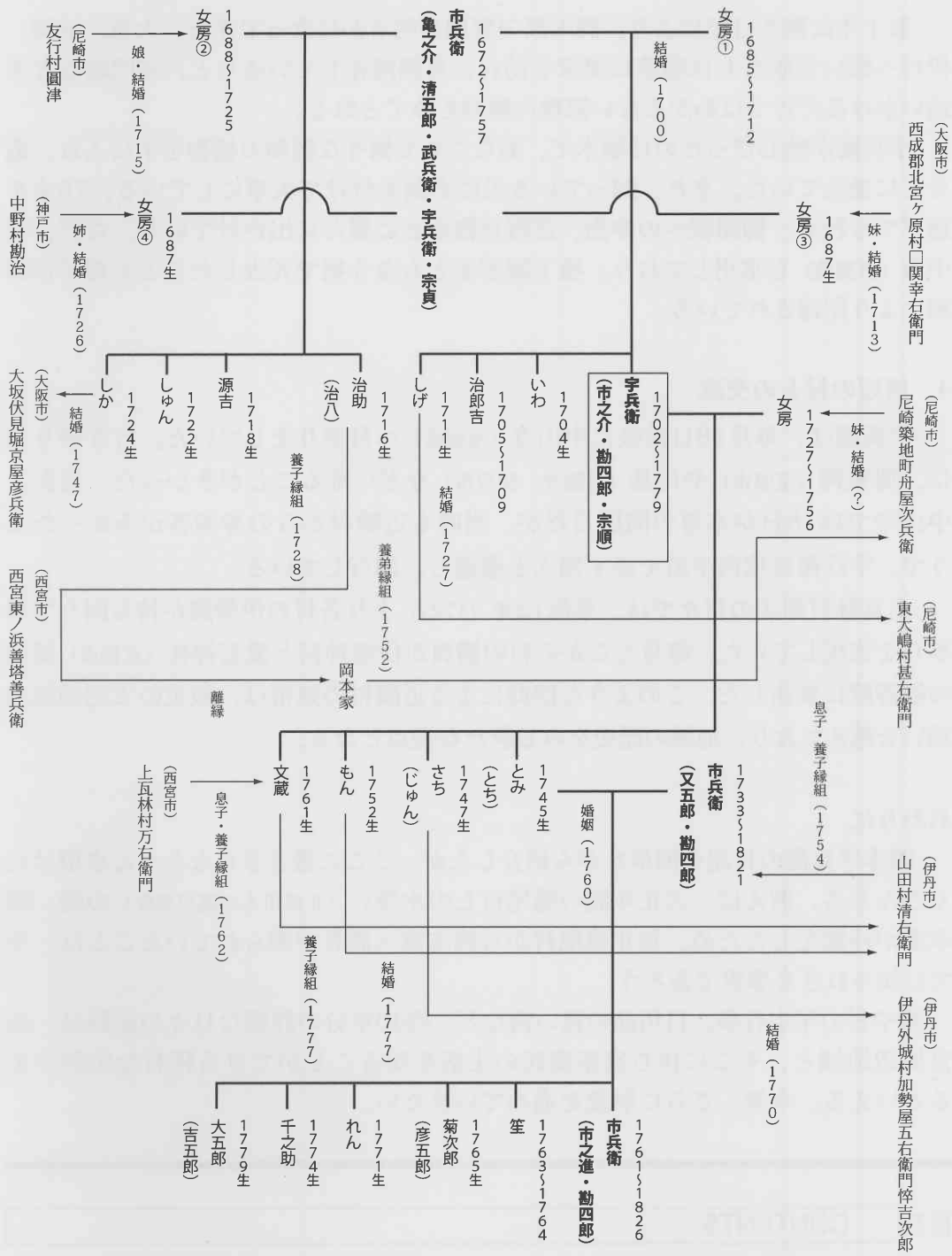
※　上瓦林村宗門帳、岡本宇兵衛の日記より作成。

花（生け花）にも招待されており、文化的にも豊かな生活だったことがうかがわれる。

日記で最も多い記事は信仰に関するものだが、村内には伊勢講・愛宕講・念仏講・庚申講・行者講があり、岡本家も参加し、当番を勤めている。そこからは、大庄屋で豪農という姿とは違う、村の構成員としての岡本家がみえる。

上瓦林村の檀那寺は浄土宗極楽寺の一寺で、氏神は日野神社である。氏神境内に神宮寺があり、日記が書かれた頃には禅宗の僧が宮守をしていた。本尊は観音で、不動尊・地蔵尊も安置され、火事で損傷した像を京都で修復したことなどが

【図】　岡本宇兵衛を中心とした家系図



※寛文13年（1673）〜安永9年（1780）の上瓦林村宗門帳などの記述をもとに作成。数字は西暦。

日記に見える。また、神宮寺は筍が有名だったようだ。毎年5月に尼崎藩の藩士たちが「見物」に来ている。村は料理を振る舞い、藩と藩士へ筍を献上している。

3. 岡本家と宇兵衛の生活

数十年に渡る日記により、岡本家の変遷が明らかになってきた。大坂、尼崎、伊丹へ嫁いだ娘たちは頻繁に実家を訪れ、長期滞在しているなど、宗門帳などを追いかけるだけではわからない家族の動向もみてとれる。

宇兵衛が熱心だったのは植木で、あちこちで様々な種類の植物を手に入れ、庭などに植えていた。また、飼っている犬に名前を付けて大事にしている。70才を過ぎても社寺、御開帳への参詣、芝居見物などに盛んに出かけていた。ただ、安中散（胃腸薬）を常用しており、嚥下障害をともなう病で死去したことも養子市兵衛により記録されている。

4. 周辺の村との交流

宇兵衛は、毎月18日前後に中山寺（宝塚市）へ月参りをしていた。行き帰りには、清荒神（宝塚市）や行基（昆陽寺、伊丹市）などへ寄ることが多かった。現在、中山寺では18日が本尊の開扉日だが、当時も近隣村からの参詣客が多かったようで、宇兵衛は境内や道で必ず知人と遭遇し、同行している。

上瓦林村周辺の村々では、享保12年（1727）より各村の伊勢講が持ち回りで月参りを実現していた。毎月どこかの村の講員が伊勢神宮と愛宕神社（京都市）境内の福寿院に参詣した。このような信仰による近隣村の連帯は、領主の支配領域の違いを越えており、地域の歴史をみる新たな視点となる。

おわりに

岡本宇兵衛の日記を簡単ながら紹介したが、ここに書ききれなかった事項はたくさんある。例えば、天正年間の鳴尾村との水争い（北郷用水の義民事件）の時、岡本家が仲裁をしたため、毎年鳴尾村から岡本家へ酒肴が贈られていたことは、今では知られざる事実であろう。

家や村の年中行事、日用品の買い物など、約40年分の詳細な日々の記録は、西宮周辺地域と、そこに住む富裕農民の生活を知ることができる稀有な史料であるといえる。今後、さらに解読を進めていきたい。

目次　CONTENTS

第29回特別展示「西宮の前方後円墳–津門稲荷山古墳をさぐる–」（森下真企）…1

岡本宇兵衛の日記を読む（衛藤彩子）…5

西宮市立郷土資料館ニュース第39号　平成25年（2013）7月30日